
次元世界は革新へと向かう

三毛猫ヤマト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次元世界は革新へと向かう

【Nコード】

N37760

【作者名】

三毛猫ヤマト

【あらすじ】

リリカルなのは×ガンダムOOのクロス物です
無印前から始まりますが、その時点からかなり原作とかけ離れた物に成っていますので、それでも良いと言う方はどうぞ
あと、作者は他にも一つ、小説を投稿しており、メインはそちらなのでかなり更新は不定期になると思われます

プロローグ(1)

新暦60年

時空管理局は管理外世界の探索中に次元管理局には及ばないまでも百あまりの次元世界を管理する人類とであった

次元空間はいわば宇宙空間のような広がりでありその世界の中の、未接触の人類との遭遇とは、謂わば宇宙人との遭遇と言っても過言ではない事であった

そして、二つの世界が邂逅を果たす

時空管理局側 新暦60年 次元世界連合側 西暦2306年の事であった

すぐに、次元管理局は彼らとの交渉に出た。彼らもそれを望んでおり交渉が行われた

彼らの名は次元世界連合、百を超える次元世界が集まってできた連合組織である

だがこの時空管理局と次元世界連合の交渉で両者の間に致命的な亀裂を生みだしてしまった

時空管理局が次元世界連合に要求したのは自分たち時空管理局の管理世界への登録と現在次元世界連合が管理しているロストロギア、次元世界連合ではオーパーツ、ロストテクノロジーなどと呼ばれている物品の接収という一方的なものであった

時空管理局側の者たちまるで自分たちの方が立場は上であるかのようにふるまい一方的な要求を次元世界連合へと突きつけたのだ

彼ら時空管理局の者は、次元世界連合の事を確かに多くの次元世界がまとまってきたものであるとは認めてはいたが、それでも所詮は管理外世界のさらに辺境と呼ばれる世界の集まりで、率直にいえば「田舎者の集まり」程度にしか見ていなかったのである

だが、勿論この対応に次元世界連合は大きく反発、時空管理局と次元世界連合の間に明確な対立を生んでしまった

時空管理局はこの反発に対して次元世界連合を時空管理局に反発する反時空管理局国家群、反発組織とし、さらにはロストロギアを違法に所持する危険国家に認定しこれらに、武力によるロストロギアの接收、国家、組織の解体を行うこととした

この対応に次元世界連合は全面戦争の構えを見せそれに応じた

かくして新暦61年、西暦2307年、時空管理局と次元世界連合が接触してから半年が過ぎたころ時空管理局と次元世界連合との間に時空管理局としては半世紀ぶりの戦争が始まった

当初、時空管理局は管理する次元世界の数で上回るということで物量的にも上回ると考えられる自分たちの勝利を確信していた

だが、その幻想はすぐさま崩れ去ったのであった

ここで重要なのは、時空管理局、次元世界連合は共に魔法と言う技術にいたりそれらを流用してきた世界であったと言う点

だが魔法の才能と言うのは万人が持っているものではない、さらには魔法の才能を持つ者の中でもその才能の大きさには大きな開きがある

本来なら管理する次元世界の数で上回る時空管理局のほうが確率的、割合的に考えても多くの魔法の才能を持つ者、魔導師を保有していると考えるのが自然であり、実際時空管理局側の方が魔導師の数では、大きく上回っていた

だが、ここで問題となるのは時空管理局と次元世界連合の魔法に対する姿勢とその技術を発展させた方向性の違いである

時空管理局は、魔法至上主義の組織、世界であり魔法の力、才能を絶対視し質量兵器等の万人に扱える力が「危険だ」と否定する組織、世界なのだ

対して次元世界連合は、魔法は一つの手段であり、それを万人に扱えるようなもの、科学と同じようにしようと考えている世界なのである

そしてこの魔法に対する姿勢の違いが時空管理局と次元世界連合の戦争の勝敗を分ける事となった

最初は、圧倒的な物量で戦争を終わらせようとしていた時空管理局であったが実際に開戦し、初めての行われた両者の戦闘の結果、突きつけられた現実には、圧倒的な物量差による時空管理局側の大敗であった

本来、魔導師の数で圧倒的に上回る時空管理局であったが、その魔法に対する姿勢の違いこそが両者の間には圧倒的な差が生んでし

まったのである

次元世界連合側が発展させた技術とは、魔法を万人が扱うことのできるもの『科学』の様にする、つまりは『魔法の科学技術化』である。そして、それに成功した次元世界連合では魔法の才能を持たないものでも道具さえ用いれさえすれば誰でも魔法と同じ結果を生み出す事が出来るようになったのだ。

これにより、魔法の才能があるもの、魔導師しか戦うことが出来ない時空管理局は魔法の才能を持つもと持たない者、誰もが戦う事が出来る次元世界連合の圧倒的な物量の前に敗れ去ったのである。

さらに、彼ら次元世界連合は多くの戦争の結果出来上がったものであり、時空管理局と接触する数年前にも大規模な戦争を経験したばかりであった

そんな世界で進んだ技術とえば、兵器開発である。戦争に勝つために相手の国よりの強力な兵器を作ろうと発展した兵器開発技術、その結果生まれた兵器、武器こそがMSモビルスーツデバイスである

全身を機械の装甲で覆い装備した武装により相手を倒す兵器型デバイス

これに太陽光エネルギー等を充填する事により魔法の才能を持たないものでも魔法（厳密には違うが）を使う事が出来、

他にも、魔法の才能を持つ者の中でも一部の者しか習得することが出来ない飛行魔法も、専用のユニットを装備することによって誰もが空を飛べる様にし

更には、海中はもちろん人間に取っては最悪の環境である宇宙空間や次元空間での活動も可能にし、遂には、魔導師にとっての地獄、

虚数空間をも制覇したのである

これら戦闘に特化しただけでなく幅広い活動範囲を誇る武器を持つという点でも次元世界連合は時空管理局に対して有利に立っていた

そして戦争は続いていった

初戦で大敗をきってしまった時空管理局は、次元航行艦隊による次元連合側、次元世界へのアルカンシエルの発射を慣行、それにより次元世界連合側の次元世界が消滅し、数十億人もの民間人が危険国家国民として殺害されてから戦争は激化していき

ソレスタルビーイングと名乗る組織が戦争に参列し、次元世界連合側へと加勢した。それにより既存のMSモビルスーツデバイスを大きく上回る性能を発揮し、戦争中、最強のMSモビルスーツデバイスと呼ばれる事となる『ガンダム』が戦場へと姿を現した

戦争後半に連合内で裏切りが起こり時空管理局側へ一部のガンダムとMSモビルスーツが奪取してしまうなどの事が起こったが

新暦62年

時空管理局の全武装解除宣言により戦争は終結した

そして同年、時空管理局が管理していた管理世界と次元世界連合の次元世界が集まり新たに次元世界連邦が発足された

この時に時空管理局は解体され、その一部は次元世界連邦軍に吸収された

つまり新暦62年、西暦2308年 時空管理局はその歴史に幕を閉じたのである

プロローグ〜（後書き）

三毛猫ヤマトです

かなりのとんでも設定ですが

どろろか温かい目で見て下さい

よろしくお願い致します

三（一）三

詳細設定

リバース 逆ユニゾンシステム

数百年前（古代ベルカよりも以前）に次元世界連合のとある世界に、時空管理局側の次元世界で起こった次元断層により流されて着てしまったユニゾンデバイスの技術を流用、発展させ開発されたシステム

本来、ユニゾンデバイスとは、魔導師と融合し^{ユニゾン}魔導師の戦闘能力を格段に向上させるデバイスであるが、このシステムはその融合の際、本来ならば魔導師にユニゾンデバイスが融合するところをユニゾンデバイスに魔導師、操縦者が融合するというシステム

現在では、次元世界連合側のほぼ全てのMSデバイスにこのシステムが搭載されており、これによりたとえ戦闘などで、腕や足などを失っても操縦者の方へは、その部位に傷を負う程度で、実際に腕や足を失うようことはなくなった

ちなみにこのユニゾンデバイスからの知識により魔導師等の補助機器の名称をデバイスと呼称するようになった

モビルスーツ MSデバイス

MSデバイスとは大まかに分けて機体、動力、A？の三つで構成されており、さまざまなユニット、オプションパーツを装備、換装することにより、誰もが、飛行、砲撃、結界といったモノを使える様になる

構成要素のひとつである機体は、すべてが機械で作られており、たとえ魔導師であっても馬力では、決して勝つことはできない

動力については、戦争初期は太陽光発電システムなどによるエネルギーを使用していたが、ソレスタルビーイングの技術提供により西暦2308年以降は物体に吸蔵させる事で、その強度を高めたり質量を軽減させ、機体や操縦者に加わる慣性力の軽減、放出する

ことで大きな斥力を発生させ自由自在な飛行を可能にするなどの副
次効果を発生させるGN粒子を生み出す（正しくは貯蔵する）GN
ドライブ T が主流となってきた

詳細設定（後書き）

三毛猫ヤマトです

次元世界連合の歴史についてですが、あの世界では00の世界と違いソレスタルビーイングが介入する前に世界が統一され、その後時空管理局と出会ったつという設定です

つまりは、世界設定は映画の00の世界で、時空管理局はELSの役回りと言うわけです

そんな、世界なのでソレスタルビーイングの役回り、目的は本編完結後での世界の抑止力と人類を革新へと導くことという設定です
この設定は随時更新していくことになると思いますのでよろしく
お願いします

ブログぐっ出会いぐ（前書き）

更新に一月もかかってしまい申し訳ありません

リアルの方で、文化祭や就職活動などごたついてしまい遅れてしま
い申し訳ありません

プロローグ〜出会い〜

なのはが、おきたとき、そこはしろいおへやのなかだったの

おとうさんがけがをしてびょういんにおとまりするようになってから、おかあさんもおねえちゃんもいそがしそう、おにいちゃんもなんだかとてもこわいおかおをして、どうしようでけんをぶっているの

だからなのは、みんなにめいわくをかけないように、ひとりでいいこにしていけないといけないの

だけども、なのは、しらないところにいるの

いつもどおり、ひとりでいいこにして、こうえんであそんでいたのに、いつのまにかねちゃって、おきたらしらないおへやのなかになっていたの

はやくおうちにかえらないといけないの

なのはは、いいこにしていけないから、はやくおうちにかえらないといけないの

でも、どうしたらおうちにかえられるかわからないの

おへやのなかにあるどあはぜんぜんあかなくて

どあのむこうにおおきなこえでははなしかけてもだれもへんじしてくれないの

なのはは、いいこじゃなきゃいけないのに

はやくおうちにかえらないこは、いいこじゃないのに
それとも・・・・・・・・・・・・・・・・

なのはは、すてられたのかな？

なのはは、いいこじゃないから

いけないこだから、いらぬいこなのかな？

だから、なのはは、ここにいるのかな？

おかあさんたちに、すてられちゃったのかな？

そうおもつとこわくて、さびしくてなのはは、いつのまにかない
ていたの

おかあさん・・・・・・・・いいこにしてるからむかえにきてよ

なのは、いいこにしているからむかえにきてよ

おねえちゃん、じゃましてりしないからむかえにきてよ

おにいちゃん、なのはは、わるいことしないからむかえにきてよ

ずっといいこにしてるから、むかえにきてよ

わがままなんかいわないから、むかえにきてよ

なのはを……すてないで

いいこに、してるから、なのはをすてないで

そうしてなのはが、ないているといきなりおっきなじしんがきたの

なのはは、こわくなっておへやのかどであしをかかえてまるくな
っていたの

そして、そのあとすぐにおへやのなかにおっきなおとがなりだし
たの

きゅうきゅうしゃとかしょうぼうしゃみたいな、さいれんのおと

なのはは、こわくなって、おへやのすみでみみをふさいでさんか
くすわりをしていたの

そうしていたらときどきおへやがゆれたの

それにとまった、とおもったらこんどは、もっとおおきくゆれたの

それで、どンドンじしんがおおきくなっていったら

きゅうにおへやのどあがこわれてすごいおとがしたの

なのはは、おどろいてどあがあったところをみたら

そこには、てんしさまがいたの

時空管理局側無人管理外世界

無人世界であるこの世界に隠れるように作られてた研究施設、その中を突き進む一つの機影

人の形に近い姿をしたそれは、向かってくる敵と魔力弾を右の腕に装備した小型の盾と一体となった剣で切り捨てていく

悲鳴と怒号、爆発音、サイレン、それらが入り混じったその空間の中でもその者は、何の迷いもなく突き進む

その身は、青と白で彩られ、そしてその背中からは光輝く粒子によって形成された翼を持っていた

炎や煙が立ち込めるその場では、その姿はより一層とその物を際立たせる

そんな破壊がなされた空間の中、それを行った者、その機体を操縦する者は、どこかへと通信を繋げていた

「こちらエクシア、第5ブロックの制圧を完了した。このまま第13ブロックの移動し制圧にかかる」

通信をするパイロットの声は、男の声で会ったが、まだ声変わりも終えていないのか若干声のトーンが高くいくらか幼い印象を受ける

だが、その声からは、その幼い印象にはまるでそぐわないような

言葉を発する

「こちら管制、了解しました。後続のセルゲイ中佐が捕えた研究員と押収した資料によるとその区画に要救助者が何名か隔離されている模様です。発見次第、連絡をお願いします。そちらへ部隊の者を向かわせますので」

「了解した」

その者は通信を切ると自身が駆る機体の管制人格へと話しかける

「ウルスラグナ、GN粒子の散布状況は？」

すると透き通るようなきれいな女性の声が聞こえ、それに返答する

「作戦目標である当研究施設をふくむ作戦予定範囲内全体にGN粒子が充満しており、現在、管理局側の通信、レーダーなどの管制機器はすべて使用不可能である推定されます」

「わかった。予定通り第13ブロックへ向かうぞ」

「了解しました。マイスター刹那、モニターヘルトを表示します」

そう管制人格が言うとその機体、エクシアはゆっくりと浮き上がり研究施設の奥へと姿を消した

新暦62年

西暦2308年

現在、ソレスタルビーイングは無限等しいの広がりがあるのでは、ともいわれる次元空間の広がりの中で出会った二つの文明社会、そしてその代表組織とも呼べる者達の間で行われている戦争に参戦していた

そのもう一つの宇宙ともいえる次元空間の広がりの中で出会った二つの文明社会の代表組織

その一つとは百を超える次元世界之国家群が集まったり、一つとなつて樹立された次元世界連合

もう、一つはその次元世界連合を超える数の次元世界が集まった文明社会、その次元世界の治安維持、司法的取り締まりおよび立法、世界によっては行政までをも行う時空管理局

この二つの文明社会の代表組織による戦争にソレスタルビーイングは参戦しているのだ

もともとソレスタルビーイングに参加している者たちは、そのほぼ全てが次元世界連合側の次元世界の出身だ

その事からもわかるように、ソレスタルビーイングが組織されたのも次元世界連合側の次元世界である

だが、だからと言って、ソレスタルビーイングの最終目的を考えれば、どちらか一方に肩入れし戦争に参加するというのは、あり得ない事であった

だが、二つの文明社会が出会ってから、ソレスタルビーイングが調査した結果浮かび上がってきた時空管理局という一組織にしては集約しすぎた権力とそれによって隠された闇、そして次元世界連合に対して行ったあまりにも一方的な要求とそれを拒否した連合にたいする対応とそれらの情報統制などからソレスタルビーイングは時空管理局をこのまま野放しにしておくのはあまりにも危険だと判断し、次元世界連合側としてこの戦争に参戦することになったのだ

そして現在、ソレスタルビーイングの武の象徴ともいべき、人型兵器デバイス『ガンダム』と連合とによる連携作戦が行われていた

ことの発端は、時空管理局側次元空間領内へと連合の艦と共に領内へと侵入したソレスタルビーイングの多目的次元輸送艦プロレマイオスのオペレーターのカリスティナ・シエラが行った管理局へのハッキングが始まりである

そのハッキングした情報の中に、劣勢が続く戦況を打破すべく管理局の裏側の者たちが、魔法が認知されているとされていない、つまりは管理世界、管理外世界問わずに魔力資質の高い者を拉致し

あるものは薬で自我を消し管理局の言いなりの人形に変え戦線へ投入したり、あたらしい技術のための実験体されたり、人造魔導師計画のための素材として扱ったりなどの非人道的、実験を行っているということがわかったのだ

これを知ったソレスタルビーイングは、すぐさまこれを連合へと知らせ、連合と共同してこれらの事を行っている管理局の裏の部隊および研究施設を殲滅を決定したのだ

そして現在、連合艦隊所属のセルゲイ・スミルノフ中佐率いる人

型機動兵器デバイス、通称MSモビルスーツデバイスを使用するMS部隊と後に全次元世界中最強のデバイスと呼ばれる事となるMSデバイス『ガンダム』、その内の一機による時空管理局の違法研究施設への強襲作戦が行われていた

「現在、当ブロックの制圧率74%です」

ソレスタルビーイングのガンダムマイスター刹那・F・セイエイが、自身へと向かってくる魔導師を右手の装着されたGNソードで切り捨てると自身が駆るソレスタルビーイングのMSデバイス、GN-001ガンダムエクシアの管制人格ウルスラグナがそういった

「要救助者の反応は？」

「いまだ、発見できていません」

そんな会話をししながらも刹那は研究施設の通路を進んでいく

その研究施設を警備している魔導師を切り捨てながら

「死ね！殺刃鬼！」

そこへ、魔力人を発生させたデバイスを振りかざしながら魔導師がエクシアへと突っ込んでくる

だがその瞳は、狂気の色で彩られていた

「貴様らのような犯罪国家群の者を野放しにしておくわけにはい

かんだ！管理局が管理してこそ世界の平和は成り立つ！」

そんな凶刃をエクシアはよどみなく右手のGNソードで受け止める

魔力刃を受け止められた魔導師は、すぐさまエクシアから離れて自身の周りに残っている魔力のすべてを使って二十余りの魔力弾を作り出す

「死ねえええー！」

その声と共にその魔力弾のすべてがエクシアへと向かっていく

ふつうの魔導師であれば一溜まりもないであろう魔力が込められたその魔力弾は、ランクでいえばAAランクにも相当する威力を秘めた殺傷設定の魔法である

だが、その殺意の塊たちに対してエクシアは真正面から向かって行ったのである

そして、エクシアは自身へと向かってくる魔力弾を時には右手のGNソードで切り払い、左手のGNシールドで防ぎ、最小限の動きでかわしていく

そして、その魔法を放った魔導師の前まで来るとエクシアはGNソードを振りぬぎ、魔導師の体を二つに切り分けた

だが、敵を倒してもエクシアとユニゾンしている刹那の顔には、苦渋の色が浮かんでいた

「……………なぜ、この世界はこうも

歪んでいるんだ……」

自分がたった今殺した魔導師に視線を向けながら刹那はそうつぶやく

その声からは、刹那のこの戦争に対する行き場のない怒りが感じられる

そんな中、ウルスラグナが刹那へと声を上げる

「マイスター、要救助者と思われる生体反応を感知しました」

「ッ！ウルスどこだ？」

「次の分岐路を右へと入た、通路の一番奥の部屋です。その中からおそらくは、子供と思われませんが生体反応を感知があります」

「ウルス、後続の部隊へと連絡を！救助班をこちらに向かわせるように」

「イエス、マイスター」

そんな会話をしながらも刹那はすでに目的の部屋の前へと到達していた

（生体反応は……部屋の隅の方に一人！）

反応がドアのそばにはないことを知ると刹那は右手のGNソードでドアへと切り込みを入れその切った部分を蹴り飛ばしてなかへと侵入した

その部屋の隅の方には、涙を流しながらも驚いた顔をしてこちらを見つめる4〜5歳ほど栗色の髪の子がいた

そしてこれこそが、栗色の髪の子、高町なのはにとっての運命の出会いであり、後の彼女に正史とは違う道を歩ませることとなる起因でもあった

プロローグ（出会い）（後書き）

三毛猫ヤマトです

前書きでも書きましたが、更新が遅れてしまい本当に申し訳ありません

ですが、このあとメインの方も書き上げなければなりませんし、期末試験も迫っているのですさらに更新が遅れるかもしれませ

こんな駄文小説ですが、精一杯頑張っていきますのでどうかよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3776o/>

次元世界は革新へと向かう

2010年12月25日22時08分発行